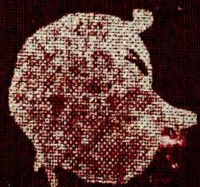


室生犀星

富岡多惠子



近代日本詩人選 11

# 室生犀星

富岡多惠子



筑摩書房

富岡多恵子（とみおかたえこ）

一九三五年大阪に生れる。一九五八年大阪女子大学英文科卒。詩人・作家。著書に、『富岡多恵子詩集』（思潮社）、小説集『丘に向ってひとは並ぶ』『仕かけのある静物』『植物祭』（中央公論社）、『冥途の家族』『獨狗』（講談社）、『壺中庵異聞』（文藝春秋社）、評論『近松浄瑠璃私考』（筑摩書房）、『さざまなうた』（文藝春秋社）、『歌・言葉・ニホン人』（草思社）、エッセイ集『わたしのオンナ革命』（大和書房）などがある。

室生犀星 近代日本詩人選11

一九八二年十二月二十五日 初版第一刷発行

著 者 富岡多恵子

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八  
郵便番号一〇一―九一  
電話 〇三（二九）七六五一（営業）  
〇三（二九四）六七一一（編集）  
振替東京六一四―二三三

印刷 明和印刷 製本 和田製本

©1982 Taeko Tomioka

0392-13911-4604

目次

一 詩人の誕生

歌に瘦せたる蛙／何も彼も詩の世界だった

三

二 『愛の詩集』と『抒情小曲集』

四

二つの詩集の刊行順序／萩原朔太郎との出会い／口語自由詩の問題

三 詩から小説へ

六

小説への動機／詩人と小説家

四 詩の微熱

三四

『亡春詩集』——長男の死／『哈爾浜詩集』——満州旅行／『我友』——朔太郎の死

五 戦時下の詩

一八

六 詩の晩年

二七

「詩」を脱ぐ／小説家の詩／『昨日いらつして下さい』と「晩年」

年 譜

テキスト及び主要参考文献

あとがき

函装画Ⅱ加納光於〈作品〉（1979 部分）

三〇

二九

二八

室生犀星



## 一 詩人の誕生

### 歌に瘦せたる蛙

夏の日の匹婦の腹にうまれけり

これは『犀星発句集』に出ている句である。

室生犀星は、生母を知らずにその生涯を終えた。父親は小畠弥左衛門吉種、生後間もなく、真言宗寺院住職室生真乗の内縁の妻赤井ハツにもらわれて、ハツの私生子赤井照道として届出され、七歳の時に室生真乗の養嗣子となって室生姓を名のる、というのが犀星の出生の事情とされてきた。新保千代子は『室生犀星 ききがき抄』で犀星の生母は女中はる、本名佐部ステだと推定し、犀星の長女室生朝子は『父犀星の秘密』で父親の生母を女中はるとは別人の林ちか（明治二十二年当時は山崎ちか）と推定している。

明治二十二年の夏の日、八月一日にひとりの男の子がおそらく父親よりもかなり若い女から



生れた。その時その子の父親吉種は六十三歳、加賀藩足輕組頭百五十石を家督相続して劍術の指南であつたが、維新後も道場を開いていた。吉種には二十七歳になる長男生種があり、生種はすでに結婚して富山県下の小学校校長であつた。長女梅も結婚していた。二年前に妻を失つていた吉種の身边にはだれもいなくなつていた。勿論、当時の小畠家は裕富であり、使用人はいたが、妻がするように吉種の世話をする女はいなかった。そこへ、はると呼ばれる女中が家にきたか、高岡で芸妓をしていたか、と吉種がなじんだか、いずれにしても六十歳すぎた男やモメの吉種が若い女性と關係ができて男の子が生れた。

しかし、小畠家の体面もさることながら、小学校校長をしている長男生種にとって、二十七歳も年下の弟が忽然とあらわれたことは、相当の衝撃的事件であつたはずで、吉種より息子の生種の方が、父親が若い女に生ませた男の子のことで頭を悩ませたかもしれない。男の子は生れるとすぐに、赤井ハツのところによられ、育てられることになった。その男の子にとって、生母は死ぬまでわからなかったが、現在までのところ、犀星の読者にとつてもわからぬままである。少くとも、筆者は、室生朝子の林ちか説が出現したことでもあり、犀星の生母をだれだと断定する術はなく、不明のままですすむしかない。

室生犀星の詩の最初は「俳句」である。昭和四年、四十歳にしてはじめて編んだ『魚眠洞発句集』の序文に「自分が俳句に志したのは十五歳の時である。」と記している。その十五歳の時、犀星はすでにつとめ人であつた。学業についたのは、六歳から十三歳までの七年間にすぎ

ない。当時の尋常小学校は四年制であり、犀星は尋常小学校卒業後、やはり四年制であった高等小学校に入学したが、それを三年でやめた。現在の学制であれば中学校二年の時にはもう学校にいなかったことになるが、たいていの者が高校、大学まですすむ今日の感覚によって犀星の学業をみじかすぎるといふことはできないだろう。

高等小学校を中途退学した少年は、兄真道がつとめる金沢地方裁判所の給仕になった。給仕の初任給は二円五十銭、盆と暮に五十銭昇給した。兄真道は、犀星と同じく赤井ハツにもらわれて育てられてきた子供である。赤井ハツはこのふたりの男の子の他、女の子ふたりも子供として育てていた。そのうち、姉の方はハツの姪であった。

兄と姉、それに犀星に妹の四人は血のつながらぬ兄妹であり、この四人の育ての母赤井ハツももとは他人であった。犀星の幼年時代はこれらの家族の中で過ぎた。不思議といえば不思議な、異形の家族といえた。養父は寺の住職であった。その寺は、檀家をもつ檀那寺ではなく、賽銭だけの祈願寺であったから裕福とはいえなかった。それなのに、四人もの子をもらって育てているその赤井ハツという人物はどのような女だったのだろうか。結婚もせず子も生まぬ女が生れたばかりの赤児を次々にもらい受けて育てている。赤児には生みの親から養育料がつけられてきたのであろう。また盆暮や節季、またなにかあるごとに物品が生みの親の方からとどいたかもしれない。しかし、金や物品だけで次々に子供をもらい受けるには、赤児の世話には本人がするのであり、その子供らが長じて稼ぎを得て養母を養うには年月の長い労苦が必要であ

った。

それまでの貧困や無智や愛情の入れちがいが、ないまぜになったところで赤井ハツは女の人生の横道へそれていって、どこのだれの子か、かわりない赤児の乳くさいにおいに、女の生活を一瞬触発されて抱きしめたのが、もらい子のはじまりであつたのかもしれない。ただしその子育ては、尋常に、おだやかにはこばれなかつた。いつも不安定な生活と不安定な感情の起伏にしたがつて、赤井ハツは子供らのまん中に独裁者となり、無智が野卑な荒廃をひきずつて子供らをたえずおびえさせた。この養母、赤井ハツへの憎悪は、かたちを変えて、のちに何度も犀星によって書かれた。しかし、犀星が幼年時代の生活を書き出すのは三十歳になつてからであつた。

「自分が俳句に志したのは十五歳の時である。当時金沢の自分のゐた町裏に芭蕉庵十逸といふ老翁が住み、自分は兄と五六度通うて発句の添削を乞うたのが始である。十逸さんは宗匠だつた。併しどういふ発句を見て貰つたか能く覚えてゐない、只、十逸さんは宗匠らしい貧乏な併し風雅な暮しをしてゐたやうに記憶してゐる。」（『魚眠洞発句集』序文）

この文章から察せられる雰囲気には、ひとりの少年の文学への原初的な、それがための孤独でやみくもの姿ではなく、むしろ町家の人間が行う遊芸に対する態度がある。また金沢というまちには遊芸の教養があつた。

もの心つくかつかぬかの頃から、養母の、いつ爆発するかわからない不機嫌や暴力の顔色をうかがって暮してきた貧しい少年も、わずかであっても自分の稼ぎを得た時に、裏町に住む宗匠に俳句を習いにいく。同じく裁判所の給仕をする兄に誘われたものか、貧乏ではあるが風雅に暮しているように見える老いた宗匠に句を見てもらうことが、金のかからぬ手近なひと並みの遊びであったからか、家に帰ればもらい子ふたりの給料をとりあげることしかよるこびの声をあげぬ養母からのがれての、唯一の楽しみであったためか、とにかく、兄弟ふたりは、およそ家の中とは別の世界に連れだっていたのであろう。

ただし、この宗匠のもとに通って見てもらった句は、のちに本人も記憶しないというくらいなものであり、おそらくこの時の俳句の稽古は、教師に反抗的だったために高等小学校を三年で退学した少年の、鬱屈の皮をつき刺すまでには到らなかった。俳句が詩人犀星の「文学的幼稚園」となるのは、裏町の宗匠の添削ではなかった。

それにしても、室生照道という少年が楽しもうとして手を伸したのは、少年らしい現実的歓喜ではなく、稽古事とはいえ、少くとも言葉という抽象物を弄ぶ「発句」であった。家庭ともいえぬ家庭、「無学な人間がより集まつて」血のつながらない「他人同士が植民地部落のやうに、一家族をつくりあげてゐた」(『弄獅子』)そういう家族の中で、少年は童謡や童話、子供向きの読み物などとは無縁に大きくなり、子供の物語を読むいとまも知る間もないうちに、現実のオトナの言葉にいわば凌辱されて暮してきた。

昼間から酒を飲み、子供らをやくたいもないことで叱りとばしながら家事労働や稼ぎ仕事に追いやる養母赤井ハツの、野蠻にびりびりひろがる声というものは、子供の言葉を封じるものであっても開くものではなかった。室生照道は、人間のナマの言葉の「愛となさけ」を知らずに、また人間の発する言葉に愛撫されることもなく子供の時代をすごしてしまっていた。その、石のつぶてのごとく理不尽に降ってくる現実の言葉は恐怖や憎悪の対象でこそあれ遊びや興味の対象になるはずはなかった。したがって、世間人のたしなみや遊びとしての稽古事である「発句」であつても、そこで言葉は現実の恐怖からでんぐり返つて、自分ひとりさがさわつてみることでできるおもしろいものに変身してあらわれてきたのである。

犀星が給仕として十三歳の時からつとめた金沢地方裁判所には、川越風骨がいた。少年照道の上司川越弥一は風骨と号した俳人であつた。少年給仕はこの上司に句を見てもらうようになり、それは裏町に住む十逸宗匠の添削とは異つて、少年の文学的感興を刺激した。「十六七歳の頃、当時金沢俳壇で声名のある河越風骨氏に、毎週数十句を物して添削を乞うてゐた。自分の発句道を徐ろに開眼させて呉れたのも、その道に熱烈だった河越氏に負ふところが多い。」（『魚眠洞発句集』序文）と犀星みずから記しているが、この年齢については本人の思いこみ、思ひがちがあるから正確とはいひがたい。しかしおそらく裁判所につとめはじめて三年くらいの間は、あとさきもわからぬ無手勝流儀の読書や書きものの独学独習だったのだろう。新保千代子の調べた金沢地方裁判所職員録によると、明治三十五年四月に二円五十銭の給料で出発し

た犀星は二年で「給仕」から「雇」という階級に上ったとはいえ、五年がかりで普通の昇給の勘定ならば十円になっているところ、明治三十九年十二月現在として月給七円と出ているそうである。つとめ先の仕事よりも、他のナニカに熱中していた様子が読みとれる。因みに、明治三十七年十月十一月十二月の三ヶ月に、「北国新聞」に出た句は次の六句で照文という号にて投じられたものである。

水郭の一林紅し夕紅葉  
渋柿や三日月かゝる縄手村  
末枯の一軒寒し石の怪  
旅僧の一夜で去りし十夜哉  
宗岸もお園も十夜詣哉  
神木を伐りし祟りや神の留守

この時犀星は十五歳であった。次の年の「北国新聞」に出た句は五句、つづいて翌年は五十句、次の明治四十年十八歳になると、「北国新聞」「北陸新聞」その他二、三の雑誌を合わせると、百七十九句が出ている。さらに四十一年には二百六十五句。毎日のように新聞に出ている年がある。当時「北国新聞」の選者は第四高等学校教授の藤井紫影、「北陸新聞」の選者は

子規門の北川洗耳洞。藤井紫影をかこむ月例の句会には他に松下紫人、四高教授大谷繞石らの錚々たる俳人が加わっていた。まだ十代の最年少者、高等小学校中退にして裁判所給仕の犀星もそこにいた。犀星の得意が想像できる。

五十歳になった時に書いた自伝的小説『泥雀の歌』の中に、当時裁判所登記掛でやはり俳人であった葛巻桂花が新聞に書いた紀行文を引用しているが、そこに「室生犀星と云御年十六歳の自称大詩人」という言葉がある。また当時新聞の俳壇で犀星と同じく年少で注目をあびていた、師範学校給仕吹本鰯汀子と犀星のふたりに俳句合わせをさせて、鰯汀子の師匠である洗耳洞が角力の行司よろしく判定を示すということさえ、「北陸新聞」文芸欄で行われた。

地方のまちで、少年が中学校へあがるのが今日の大学へいく以上のことであつた時代であるとはいえ、学校嫌いの高等小学校中退者も体力を元手にして世間を渡るならともかく、やはり劣等意識をもたねばならなかつた。裁判所へ兄につれられてお目見えにいつて老巡査に、新米の給仕さんか、といわれた時のことを犀星は次のように書いている。——『シンマイノ給仕サンカ。』錐のさきで採みこんだやうにその言葉の屈辱の意味が、ドアのかげにゐる私の頭の中にひろがり出した。私は予期はしてゐたもののこんなに露骨に自分の頭の中に卑屈さを感じたことは、まるでなかつた。子供にも子供の地位とか名誉とかがあるものなら、それはこの給仕サンと呼ばれた時にすっかり失くなつたも同様であつた。子供が子供の地位とか名誉を失したあとにそもそも何がのこり、何がふたたびその名誉の代りになるものを取り容れることがで

きるだらうか。学問も智慧もないやうな子供はさういふところから、すでに、自分の心にあたへられた意地わるさを別の意味で次第に募らせることによつて、彼の病<sup>や</sup>ましげな生活がはじめかけるのであつた。」

犀星は十三歳の時に、「子供の地位とか名譽」の通じぬ世間になにももたずに入場した。しかもその子はほんとうの母のわからぬ、「莫連女」の私生児であり、世間の家庭とは別物の、無智と野蠻の「植民地部落」から出てきた者であつた。俳句での有名は、たとえそれがたかだか地方の俳壇という狭い世界であつても、「子供の地位とか名譽」を失つた少年に、ひと並みをもちこたえる自尊心を辛うじて与えた。俳句は、「子供の地位とか名譽」を失つて、手ぶらでオトナの世間へ入場していかねばならなかつた少年の、ひと並み、世間並みになる唯一のパスポートだつた。少年は、親や家や、家庭や世間や社会に反抗、反逆するために、孤独に俳句という文学表現にしがみついたのではなかつた。その逆だつた。俳句をすることによつて、やつとひと並み、世間並みになれるのだつた。少くとも、この少年が俳句から詩をさぐりあて、その詩を俳句でないかたちで書こうとするまでの間は、俳句によつて世間の中に入ることをしていたのである。このことは、犀星という詩人の出発の土台を考える上で、かなしいような最初の屈折を与える。「北国新聞」の俳句選者、藤井紫影は、とりつかれたように次々に投句し、句会に出てくる少年犀星を「歌に瘦せて眼銳き蛙かな」と詠んだ。



明治三十九年（十七歳）

雨細き若葉の裏の毛虫哉  
夕月や幟静けき向河岸  
香烟の紙燭におほろ不如帰  
百日紅池の真鯉の泡を吹く  
柿買て重たき市の手籠哉  
山家集読終へて雁を聞にけり  
霧立つや曾遊の笠の裏表  
百舌鳴いて高き飴や谷深し  
朝寒や日影漾ふいさゝ川

明治四十年

春宵や心迷ひの事多し  
行春や蒲公英ひとり日に驕る  
訪へどく人は皆在らず花日和  
迷ひ子をとるまく人や花の山  
鞦韆やプロンドを吹く春の風